

北教組の政治資金規正法違反事件を契機に道教委が実施した服務規律実態調査で、調査対象になった教職員は道内で三万八〇〇〇人にのぼった。調査結果は集計されて昨年八月、報告書にまとめられた。教職員の私生活や思想信条にも踏み込む質問項目があり、道教委は回答拒否者に対し処分を脅しもちらつかせた。

法律家から「憲法違反」と指摘される不当な調査票を作成して配布し、膨大な生データを職務として集計したのは道教委・教育局の職員たちだ。調査票を一枚一枚めぐりながら、良心の呵責を覚えた職員も少なからずいたであろう。「こんな仕事はやれない」と上司に抗議する職員がいなかったとしても責められない。個人が組織の決定に異議を申し立てることは勇気が要る。

組織の不当には組織で対峙する。そのために労働組合はある。道教委職員の多くが所属する全道庁労組は調査中止を高橋はるみ知事に申し入れるなどしたが、調査は強行された。問題の重大さを考えると、業務拒否戦術を含め、調査の不当性を広く訴える強力な運動を起こすべきだっただろう。

◇ ◇
道の補助金で運営されている関与団体に役員として天下りしている一人の道庁OBの言動をつぶさに観察する機会があった。道庁で部長職まで出世したこの男は、長い役人生活で権力を振るう蜜の味をたっぷり覚えたらしい。プロパー職員を自分の使用人のように扱う。彼の下にも数人の道庁OBがいるが、現役時代の上下関係を引きずり、役員をいさめることは一切ない。非常

いま、公務員労働運動に問う

識がエスカレートする中で、臨時職員の女性が雇用の更新を断って辞めていった。

役員は既婚者の彼女に「なぜひ供をつくらないのか」と執拗に聞く。一日のお茶出しタイムを指定する。インスタントは飲まないと自分専用のドリップ式コーヒを公費で買わせる。冷めたコーヒは飲めないといれかえさせる。指定タイム以外にも外出から戻ったらお茶があるかどうかを必ず聞くようにと指示する。アイスクリームや弁当、コーラを買いに行かせる……。

役員はパソコンを使わず、学習する気もない。インターネットやメールとも無縁だ。判読困難な手書きのメモを職員に清書させる。職員は本来の業務以外に、このような屈辱的な雑用に時間を割かれる。「こんなわがまま男のお守りはもうたくさんです」。臨時職員の女性はそのう言い残した。

役員は道庁時代、上司から「出張禁止命令」が出たほどの出張好きで知られた。上司の目がなくなつた今、些細な用件をつくつては出張し、安宿に泊まり、規定の旅費と実費との差額を懐に入れていた。

道が職員の天下りを「人材の再活用」と正当化するのであれば、天下りOBの勤務評定をシステム化すべきだろう。ある道庁幹部にそう提案すると、「まず職場で声を上げてはどうか」と逆提案された。しかし、ことはそう簡単ではない。関与団体の職員構成は天下りのほかに企業からの出向者、正規職員、嘱託、アルバイト、雇用延長者とさまざま。まとまりを欠き、連帯意識が希薄だ。プロパー職員は役員の命令に怒りを感じながらも、逆らうことで被るかもし

れない仕返しを恐れている。

道庁OBがすべてこのような人間だといふつもりはない。職員の信頼を得て真面目に仕事をしているOBも知っている。しかし、とんでもないOBが野放しにされているのも事実なのだ。プロパー職員が結束するための一つの鍵に労働組合の組織化がある。ごく一部を除き未組織のままに置かれている関与団体の組織化に全道庁労組はもつと熱心に目を向け、天下りOBの専横を許さない手助けをすべきである。

◇ ◇
国家の暴虐が世界各地で猛威をふるっている。丸腰の民衆に平然と銃弾を浴びせる独裁国家にも官僚機構が存在し、命じられるままに権力の手足となって働く官僚がいる。三〇〇万人を超える日本国民を死なせ、二〇〇〇万人といわれるアジア民衆が犠牲になった戦争に突入していく過程で、決断を下したのはもちろん時のリーダーたちである。しかし、赤紙一枚の手続きにせよ、国民を戦場に動員する仕事を実務面で淡々とこなしたのは地方公務員であった。

ある道庁幹部によると、役人は、命じられた仕事が理不尽かどうかを考えないよう自分に習慣づけるという。心の葛藤を封じ込める自己防衛術なのかもしれないが、思考停止した役人集団が戦争や弾圧に加担した歴史を思い起こすことも必要だろう。天下り先で傍若無人に振る舞うモンスターを排除することを含め、公務員労働運動は、権力の暴走の歯止め役となる自覚を持つべきではないだろうか。

△希▽